

入選

小さな親切の積み重ね

熊本県 井芹中学校

2年 栃原友誠

僕が小学6年生の登校時間のとき、校門の近くで校長先生と落ち葉の掃除をするのが日課だった。ある日、校門の前に小学1年生の男の子と男の子のお母さんがいた。男の子は、学校に行きたくない気持ちから泣いていて、お母さんは困っている様子なのが分かった。僕は、その様子を見て自然と体が動き、男の子に「いっしょに行こう。」と、手を繋いで男の子の教室まで行った。

男の子は泣き止み、笑顔で教室に入ることができたので、僕は自分の教室に急いで向かったが、すでに朝の会が行われていた。担任の先生から「早く座りなさい。」と言われ、すぐに着席した。

その日の休み時間、担任の先生から呼び出された。内容は、「1年生の男の子を教室まで連れて行った件」だ。朝の件を校長先生が見ていて、朝の会を遅刻した理由を担任の先生に報告してくれていたことが分かった。担任の先生から、

「どうして教室に入るときに正直に言わなかったの。」

と言われたので、僕は、

「当たり前のことをしただけなので、理由を言うのは違うかなと思いました。」

と返すと、担任の先生から「すばらしい。」と言われた。

そして、僕は父と母が日頃から、「人のためにしたことを威張^{いば}って話したり、見返りを求めたりしたらいけないよ。人に与えた親切は忘れて、人から受けた親切は忘れないこと。」と言っていたことが、なんとなく分かったような気がした。

これまで、僕は相手に対して何が親切なのか、よく分からなかった。相手に尽くしてあげたと思っても、受け取ってもらえなかったり、伝わっていなかったり、ありがた迷惑になることもある。逆に6年生のときのことは、僕としては当たり前のことと思っていたが、周りからとても感謝された。つまり、親切の受け取り方は人それぞれであり、親切とありがた迷惑は紙一重なのだと僕は思う。

親切について改めて考えたことで気づいた、小学6年生のときにはよく分からなかった、たくさんの方からの「ありがとう」の言葉。今、僕は思春期のせいか、親に対してわがまを言ったり、反発したりすることがある。だが、僕が小さいころから親は、たくさんの小さな積み重ねをしてしてくれたのだと気づくことができた。

「ありがとう」という言葉、親切を伝える大切な手段の1つである。この先、多くの人と関わって生きていく中で、日頃の小さな親切に気づけるように、僕は人に親切でありたいと思う。